The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>福田粛『ヒューマンandデザイン』 インスケイプ・デザイン 近畿印刷工業出版部 1993
Author(s)	野口, 企由
Citation	デザイン理論. 1993, 32, p. 108-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53026
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

福田　粛『ヒューマン and デザイン』インスケィプ・デザイン　近畿印刷工業出版部　1993

著者の福田粛氏は，現在大阪芸術大学デザイン学科助教授として教鞭を執られる一方，環境，景観デザイン等の分野でも研究を積まれている。大阪府家具商業組合発行の「家具展望」に1983年から1992年までの間に執筆されたものを今回この一冊にまとめられた。「デザイン」をその本質的側面から見直すと共に，著者の現在の関心の焦点である「イン・スケィプ・デザイン」という観点から分析されている。豊富な経験を通した実例を交えながら多方面から平易な解説がなされており，分野を問わず示唆に富む書であると思う。

本文は「デザインから」と「イン・スケィプ・デザインへ」という大きな2本の柱から成り，更にそれらは細かく30項目に分れている。各項目どうしの連続性はあまりないので，読者は頻繁に頭の切り替えを要求される感があるが，逆に「思考のモザイク」的側面が強調されているとも受け取れる。執筆文の集積ということで否めないとは思うが，同じ内容の繰り返しや誤字が多少気になるところがあったので，今後の課題に添えて頂ければ幸いに思う。

さて，考えてみれば「デザインは普遍的というか，もう少し生活の基盤的なところにある（p. 19)」という理念は何も新しいものではない。なぜなら，我々は日常生活の中でそのことを体を通して知っているはずなのだから。この何でもない事実を敢て多方面から粘り強く説く著者の一貫した態度に，まず深い一礼を表したい。このことこそ，昨今のデザイナー達が一番見落としやすい盲点だからである。私自身，その盲点をいつ暴露し兼ねない1人であることを思い知らされる。次のようなことが言えると思う。「もし，デザインを2本のレールに例えるならば，この本はそのレールについて書かれたものではなく，むしろ下にある枕木についてである」と。具体的には，確固たる学としてのデザインの体系付けと実践方法の選択，そして自然との共存，社会道徳としてのデザイン理念の確立，という問題に帰結することになろう。このような人間，自然，社会という環境の3本柱に携わる総合的な計画の構成要素という意味でのデザインの位置付けは，著者の指摘通り，最近の「デザインなにがし」という多々の催しに於いて断片的には現われながらも，むしろ体系付けるというよりは何か掻き回している感触が否めない。やはりこれからは，教育及び実践の両面に於いて，「バウハウスの時代と違って認識を新たにしなければならない（p. 25)」必要があり，それには焦らずにある程度の年月を費やさなければならないということは事実のようである。言葉を換えれば，デザイナーという職業が作家的崇高性を堅持するような時代は終わり，一般民衆がアマチュアのデザイナーとして一文化の生きたエレメントになるための啓蒙活動が，プロのデザイナーには大きく求められてくるということなのだろう。

著者は巻頭でまずデザインの体系付けの

在り方という問題について論じており，大変参考になる。「デザイン学部というような分野は存在できないのではないか（p. 13)」，「デザインという言葉にこだわり続ける限り，デザイン学は確立できないかもしれません。(p. 13)」，「大学では，やはり社会・政治改革，文化・文明に関わるようなレベルのデザインを扱うべきでしょう。（p. 15)」というようなインパクトのある問題提起は，評者の心中にもくすぶり続けていたことでもあり，共感を覚える。ここにはやはり背景として，著者も指摘するように，各教育機関，団体，そして現在デザインに携わる人一人一人のデザインに対する共通認識といったものが確立されておらず，学問的な立場と，経済，商業的な立場に於ける不均衡が根強く存在している。暫定的な結論として著者は，「多種多様の形にみちあふれた空間を，美しい住みよい環境として演出すること（p. 25)」，「純粋芸術・装飾・民芸といったような全ての形態が美しく存在できうる景観・背景を構成すること（p. 25)」がデザインではないかと言及する。異論もあろうが，評者はここに著者が照準を合わせている「イン・スケィプ」という概念がはっきりと表わされていることを読み取る。またそのことが現時点に留まらず，「現代のデザインによって演出された生活環境が人間の成長に対してどのような影響を及ぼすか……次またはその次の世代のことを考える……。(p. 27)」という言によって，デザインの持続的，発展的継承性を重視する姿勢へと繋がっていることを充分に判断でき，「芸術」，「亜芸術」といったものから遊離した「理性に訴えるべき」デザインの在り方を改めて感じるのである。

著者のデザインに関する基本的な考え方は，以上のように巻頭から数十ページ程で明らかに述べられている。以下，多様な時事問題や個々の環境形成エレメント（特にインテリア・スペィスに於ける）について分析がなされ，最後には都市のサイン・システムや自然公園と都市の景観デザインが取り上げられている。

「生活の調和」，「日常性」，「基本的姿勢」という項目では，形や色，寸法の調整だけでは不十分で，生活意識の調整が不可欠ということが強調されている。日常性に於ける生活意識，つまり何が真に人間的に「豊かな」日常生活なのか，そしてそれには何が真に必要なのかという価値判断に於いて，現在は「豊かさ」と「便利さ」を取り違えている面が多いという指摘は，まさに現在の日本の物質文明にメスを入れるものである。生活者の選択眼に狂いが生じ，更にその狂った選択眼が商業主義的デザインもどきなるものを助長する。選択を誤った時に生ずるものは，日常生活の中に於ける非日常性なのであろう。このことが表層的な意味でのデザインもどきを楽しむ意識として先行し，日常生活が空洞化してゆくのである。デザインと道徳，デザインと謙虚さという考え方を助長し，自らの生活環境を物質的にも精神的にもバランス良く構築するのは，他の誰でもない生活者イコールデザイナーとしての自分であるという意識が，やはりこれからの日本の文化と社会構造に浸透してゆくべきであることは間違いなく言える。

独創性については「問題意識」と「目的意識」という2点が特に強調されている。

こういった意識の基にデザインされたものは，必ずそこに客観的な価値観の裏付けを形成しており，国際的にも受け入れられ，かつ持続性のある製品となる。著者は安価で性能の良い高品質な製品という面に於いて日本の水準を肯定した上で，更に向上するには上記の2点を踏まえた日本の独創性が必要であると説く。企業側でも策を講ずる訳であるが，それが奇を衒った形やキャラクター商品として反映されている一面を，我々は淘汰されるべきこととして厳しく見つめなければなるまい。経済・産業先行型でデザイン理論が後続したことを恨むよりも，それによって引き起こされている障害が，独創性の喪失という慢性病となって広がってゆくことを食い止めなければならない。

インテリア・コーディネイターやプランナー等という資格制度についても著者の注意する通り，与えられた問題や設計課題に対する解答のデザイン的質，独創性を云々するものは少ない。そのようなことを考える時間すら与えられない場合が殆どであろう。いわゆるテクニックを覚えてパスする感がある。強いて例外を挙げるなら，昔からある室内装備設計士資格試験が記述式解答やじっくりと練った図面を引かせる形を残しており，実質上の水準は他よりも高いと言えるかも知れない。ネイムヴァリューや宣伝に左右されない資格制度を建設省，通産省はお互いの枠を越えて統一すべきではないかと考える。

著者は大学に於けるデザイン教育で，臨床的な課題を取り上げるよりも，理論と実験による体系付けが必要と説く。よく見かける課題設定には，例えば「収納家具のデザインをこれこれの条件で行いなさい」というようなものがあるが，本来は「収納家具の在り方を室内を構成する景観的及び機能的エレメントとして分析し，その分析結果を小論文と共に具体的な形態として提示しなさい」というような設定方法が望ましいのではないかと思う。後続の人達を教育する意味で，著者は「世代交代」の進め方について上記のようなことを始めとして大変心を傾けている。継承すべきところはし，改めるべきところは変化でなく進化，発展という形で改革すべきだという考え方は良いが，ただ，ディジタル化の行き過ぎだけには気を付けなければならない。アナログ的要素が通用しない仕事や生活は，過程の吟味欠如に繋がる危険があるからである。これは独創性の欠如とも大きく関係する。要はアナログとディジタルの使い分けが的確にできることである。

日本の軸組指向の形態が，「整理」という面に於いて，環境を混雑にする形で支障を与えているという指摘が随所に見られる。これについては，やはり木の文化を基盤とする日本の伝統的組立指向に問題がある訳ではなく，著者の言う「伝統を忘れてしまって欧米の形態をコピーすることにばかり気を取られたばかりに，本当に美しい形態がどうあるべきかという基準が無くなってしまったのに対し，平面上に線で考えるという方法だけが発展したわけで，そこに目的と方法に関する大きな間違いが生じている（p. 89）」ところに根本的な盲点がある。諸外国の一体感のある多面体的構造物の良さは見るべきところがあり，参考にしてもよいが，本当にそれらの形が日本人の伝統的な感性に合致しているのかどうか，あら

ゆるデザイン的判断の岐路に於いて考え直してみる必要がある。この意味では著者の「伝統文化というようなものは，そう簡単に無くなってしまうことはないのですから，それを頭の中に意識しておかなければ，異質の文化による混乱がインテリア・スペィスを生活の空間として成立させられなくしてしまう（p. 120）」という判断は実に的を得ている。

ところで評者は実習で学生に図面を描かせる場合，できるだけ実物も作らせるようにしている。これは著者と同じく，平面→立体→空間と発展する半ば盲目的に認められがちな教育システムに疑問を感じているからである。例えば椅子の課題なら，入れる空間をまず感じ，材料に当たり，素材を人間尺度で触れ，実物を作りながら，その横でプレゼンテイション図面を同時進行し，最後に口頭で発表するという形がいかに効果的かということを実感している。また，空間を設定して，そこへ環境構成エレメントを調和，同化させようとする場合は，「空間」というよりも，それが人間の活動やイヴェント，パフォーマンスを伴って活性化された「場」という観点で環境設定を行うように心掛けている。

イン・スケィプ・デザインの観点に立って空間を美しくするためのキーワードとして，著者は「美しくしたいと思う」こと，「方法」を決めること，美しくしようとする「努力」と「整理」，精神的時間的「余裕」，そして「緊張感」を伴うこと，という6つを挙げているが，これらのどれをとってみてもモノ自体の属性を云々するものはない。つまり，デザインは人間の理性と生活意識の所産であることを暗に訴えていると言える。そしてそのことは，たとえ日本人が現在混乱した物質社会の中に置かれているとしても，「諸外国に匹敵し得る文化をもっている（p. 119）」こと，そして「形づくるもの・方法・技術が少し異なってきただけのことで，それらを使う思想とか文化そのものまでもが変わる必要はない（p. 119）」ことを自覚するところを基盤とする。ディテイルについては，建築物の基本的構造や材料との関連に於いて詳細な分析がなされている。そして，少なくとも我々が日常生活の中でささやかにでも実行できる意識改革例が本書の後半にちりばめられている。例えば「見せたい」意識を抑えることでは，居住者が他に見せるため，自慢したいがための生活用具を否定し，自らが生活の場を美しくしようと謙虚に努力した結果，それが最終的には具体的なモノとなって居住者と調和し，独創性のあるヒューマンな意味での生活像を作り出すという真の図式を考えさせられる。その他，壁面や開口部への考え方，現代の和家具の在り方，部分と全体の関係の見方，等々多くの論点を設けて分析している。こういった意識改革は，それらが集積すればきっと欧米に負けない新しい日本の独創性となって認められるはずである。

実に多くの要素を一冊の中で取り扱ったものだけに，話題の豊富さに翻弄されないように読書されることを期待したい次第である。最後に，この本の中で最も印象に残った言葉を以って，著者への敬意の言葉に換えさせて頂きたい。

「ある地域の景観はその地域のデザイン的なレベルの現れである（p. 203）」

野口企由　岐阜女子大学